

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2022年12月3日

文責：JUN

広がってきた授業を変える取組

1 ベテラン教師の授業が変わるとき

10月号において、若い人の授業が変わることについて述べた。その内容に対して、これまでにないたくさんの方の反響をいただいた。それは、これからの学校教育を担う若い教師の授業力向上に、多くの学校関係者の関心が向けられていることを表している。若い教師が生き生きとしない学校にしてはならない、子どもにかかわることに喜びを抱けるような、子どもの学びをはぐくむ授業づくりに意欲を燃やせるような、そういう学校にしなければならない、そう思っておられる先生方がたくさんおられるからに違いない。

しかし、見落とししてならないのは、ベテラン教師たちのことである。今、言われている「主体的・対話的で深い学び」が登場するずっと前から、授業づくりに何年も取り組んでこられた先生方のことである。

学校に在籍するのは若い人ばかりではない。中堅やベテランの人もいて、どちらかと言うと、それらの人が学校の中心になっているのではないだろうか。そして、若い人は、教師としての経験を積んできたベテランをお手本として教師としてのありようを身につけているのではないだろうか。

そう考えると、若い人の授業力の向上は、ベテラン教師の授業にかかっているということになる。ところが、そのベテラン教師が、今、戸惑っている、困惑している。もちろんすべてのベテラン教師がそうなっているというわけではない。しかし、戸惑いがあるのは確かである。

その戸惑いとは、ICTの活用ということもあるが、それよりも「主体的・対話的で深い学び」への授業改善なのではないだろうか。ずっと、「分かる授業」を目指し、そのための指導方法を磨き続けてきた人たちにとって、「子どもが取り組み、子どもが探究する授業」とはどういうもので、そのためにどのようにすればよいのかそれが分からなくなっていると思うからである。

(1) S先生の授業が変わった！

先日、ある学校で見せていただいたのは、そういった戸惑いを抱えていたベテランの先生の授業だった。授業を拝見するうち私はふっと、その先生が「主体的・対話的で深い学び」を意識して授業しておられると気づいた。そして、そういう意識を抱いてこれまでとは異なる授業に挑戦されたその先生の行為がうれしくてならなくなった。

授業後、その先生が実行されたこと、そこで生まれた事実と難しさ、それは貴重なものになる、

それを無にしなければならないと思った。そこに、ベテラン教師が授業を改善していける道筋があると思ったからである。

その先生のお名前をS先生と呼ぶことにしよう。S先生が行われたのは国語の授業、「わたしはおねえさん」という物語を読む授業であった。

授業の前半、私が、「これは！」と感じたシーンが3つあった。

1つ目は、授業の冒頭である。なんでもないことなのだが、私の目には明らかに異なって見えた。3分もの時間、子どもたちに各自のペースで音読をさせたからである。3分という時間は短いようだけれど、従来型の授業をする人はその半分くらいで済ませている。しかも、その音読は、一人ひとりがその子どもなりに読む各自音読だ。子どもの表情がよい、読み声がよい。それを見て私は思った、これはこの授業で急に行ったことではない、普段から、このようにしていることなのだと。S先生は、子ども一人ひとりが自ら言葉に触れそこから自分なりの読みを感じるようにしているのではないか、そう感じたのだった。

その私の予想は当たった。音読が終了し、子どもたちが静まったとき、「考えを伝えあって深めよう」という「めあて」を示し、「じゃ、4の場面で自分が気になったこと聴かせて」と語り掛けたところ、それに応じて何人もの子どもの手が挙がったのである。教師に問われるまでもなく、すでに子どもたちの中に読みが生まれていたのだ。

従来型だと、音読の後教師がすることは発問である。子どもは、その教師の発問に答える形で手を挙げる。しかし、S先生は、何かを問うのではなく、「聴かせて」と言ったのである。それは、確実に、「子どもの考えから深めよう」という考え方に基づいたものだった。これが2つ目のシーンである。

そして、極めつけは3つ目だった。

一人の子どもが、「気になったこと」として、『『ちゃのもの』って、どういうことか分かりません』と出してきた。一瞬、私は、その子が何を言ったのか分からなかった。ところが、S先生はその疑問に悠然としておられる。すると子どもの中から声が上がる。「それ、『ぐちゃぐちゃのもの』のこと」と。

私は目を教科書に注いだ。すると、「すみれちゃんには、自分が、なきたいのか おこりたいのか分かりませんでした。それで、じっと、ノートを見ていました。かりんちゃんがかいた ぐちゃぐ」という文章があり、ページをめくると、「ちゃのものを 見ていました。」と書かれていた。それを目にしてようやく了解した。その子は、「ちゃのもの」が、紙をめくった新しいページの冒頭に書かれていたから何がなんだか分からなかったのだ。

私が感動したのは、S先生の学級が、こんなにも素朴な分からなさが迷いなく言えるようになっていたことだった。これは、教師が発問して答えさせる授業では決して生まれえない光景である。すべての子どもの学びは、「分からない」も「間違い」も「考えの違い」も、どれも大切にされる授業によってしか生まれえないのだ。私は、最近、それを「3つの『い』を大切に作る授業」と言い表すようになった。

そして、また、子どものこのような「分からない」を、悠然と受けているS先生が素晴らしいと思った。でも、何か月か前にもその先生の授業を目にしている。私は、その先生の前回の授業を思い起こした。その時の授業ではそういうことは感じていない。そのとき、私ははたと気づい

た。前回から今回までの期間でS先生がこういう授業に変えたのだと。

(2) 授業を変えようとするきっかけは？

この授業から数日後、私は、その学校の校長先生に電話をした。前回から今回の間にS先生にどういふ変化があったのか、知っておられることはないかと聴きたかったからである。校長先生は、今度の授業でS先生がやり方を変えようとしていたことは知っておられた。けれども、何が契機となってそういう心境に至ったかは分からないので、尋ねてみると言ってくださった。そうしたところ、S先生はおおよそ次のように話してくださったそうである。

—— 教師になって2年目、「くじらぐも」という物語の授業をしました。そのとき、事後研で叩かれてしまいました。それが、国語の授業への苦手意識になってしまったのです。その後、市の研究部会の国語部に属して勉強したこともありましたが、苦手意識は解消できないままでした。その頃の授業は、教師が発問を重ねて、子どもに答えさせる、そういう授業でした。それがうまくできないでいたのです。

本年度になって、校長先生が本校に来てくださいました。そして、学校として「主体的・対話的で深い学び」に取り組むことになったのですが、どうやってするの？と困っていました。そんな中、校長先生の紹介で、東海国語教育を学ぶ会の4月例会にオンラインで参加しました。そこで見た授業にびっくりしてしまいました。子どもって、どんな子どもでもこんなに話せるんやあって。私の授業は、正しく考えられる子と私とのやりとりだけで進めていました。だから分からない子はしゃべらない、そう思い込んでいました。その固定概念が崩れました。

6月に校長先生が私たち職員を相手に模擬授業をしてくださいました。私たちは子どもの立場でその授業を受けたのですが、そのとき、こんなふうだったら意見が出しやすいのだからって感じました。それからでした。とにかくやってみようと思ったんです。そして、「たんぽぽのちえ」の授業から、これまでの授業とは変えてみたのです。子どもの考えから始めよう、そのためその考えが聴けるようになろう、そう考えて授業するようになりました。——

学校長からこの話を聴かせてもらって、私は、そうだったのかと思った。それぞれの先生の授業にはその人の歴史があるのだと思った。そして、ベテラン教師が戸惑いから脱却できるために何が必要なのか、少しだけ見えてきたような気がした。

S先生にとって幸運だったのは、こんな校長先生との出会うことができたことだと思った。今の校長先生がこの学校に着任されなかったら、今度のような授業は実現していなかったに違いない。校長先生から伺ったことなのだが、今回の授業の直前、教材について、授業についてS先生と話をされたのだそうだ。そのとき「空中分解してもいいから、子どもの読みから始めなさい」とS先生に言葉をかけたのだという。

新しい道を歩み始めるとき、人は必ずだれか重要な人物の影響を受ける。S先生は、本当によい人と出会った、それが転換への決定的な要素となったのだと思う。

もう一つ、S先生の転換を可能にしたのは、オンラインで見た授業だった。本当に子どもはこんなふうになるのだという実際の姿を目にしたとき、はっきりと目指すものが見えたのだと思う。

教師が自分の授業を変えようと思うとき、そこになければならないのは具体的な実像なのだ。実際にそれが具現化されている授業の事実が、教師の心に強い衝撃をもたらし、それが憧れになる、そのとき、思い切った第一歩が踏み出せるのだ。

ただし、そこにもう一つ大切なことがあると思う。それは、S先生に、できないでいたのだけれど、授業を変えなければいけないという自覚が存在していたということである。苦手意識がトラウマようになっていたのだけれど、苦手意識は裏返せばよい授業をしたいという思いがあるということである。S先生にはどの子どもも読みを出せる授業への渴望があったのだ。そういう背景のあるところに、校長先生が現れ、これだと思う授業に出会った、それが、やってみよう、やらなければという思いを引き起こしたのだ。

(3) この授業改善をさらに進展させるために

ところで、この授業で、S先生はすべて思い通りにできたわけではない。そんなに簡単にはできないからこそこれまでできないでいたのだから、そうなるのは仕方のないことである。大切なのは、やってみて生まれた事実をしっかりと見つけ、次への手掛かりにすることである。私はそれを「内省的実践」とよんでいる。そういう意味から、S先生のこれからの授業づくりのための改善点を2つあげることにする。

1つは、前述した「ちゃのもの」という「わからなさ」への対応についてである。当日の事後研で私が話したのは次のようなことだった。

『「ちゃのもの」が前のページからの続きだとわかったところで、あの子に音読させるとよかったですね。そうすれば、『ぐちゃぐちゃのもの』と声に出して読むことになるので、あの子も『ぐちゃぐちゃ』と書いてあったのだと理解できるでしょう。そうしておいて、『そんなぐちゃぐちゃにかかれたものって、これからすみれちゃんのことを考えていくとき、とっても大切になるんだよ。〇ちゃん、とっても大切なところを出してくれたね』と話したらどうでしょうか。そうすれば、ただそれは『ぐちゃぐちゃのもの』の一部だったと分かるだけでなく、この子のわからなさが学びに生かされることとなります。私は、『間違いは宝物。間違いの傍らに学びのツボがある』と言っていますが、このようにすれば、この子の言ったことを生かすことができるのではないのでしょうか」

子どもが取り組み考える授業で大切なのは、正解だけを大事にすることではない。間違いも、わからなさも、その子の思いを受け止め、その中にある良さを見つけていくことである。すべての子どもの学びの実現にとってこれは重要なことである。S先生がそこまでできればどんなによかったらと思う。これが一つ目の大切なところである。

もう一つは、学びの焦点化をすることである。子どもの考えに基づいた授業でもっとも懸念されるのは、いろいろな子どもの考えが陳列されるだけで、学びが深まらない授業になることである。それを防ぐには、授業の終盤に、重要なことに焦点化することである。ただし、子どもの考えに基づきながら。

S先生は、教材研究において、「2回の『ノートを見ていました』のときのすみれちゃんの気持

ちはどう違うか」と考えさせられたらと思っておられたのだという。ところが、授業の半ばを過ぎて、ノートにぐちゃぐちゃにかかれたことに対する「なきたいのか、おこりたいのか分かりませんでした」という気持ちが分からないと子どもたちが出てきて、そこで子どもたちの思考がストップしてしまっただけである。子どもたちは、「おこりたい」なら怒ればいいし、「なきたい」のなら泣けばいい、だから、すみれちゃんがどっちか分からないというのは理解できないと言ったのだ。そんな子どもたちの言い分を前に、S先生は困ってしまったようだった。

S先生は、どうしようかと迷っておられたのだと思う。それで、子どもたちがこだわっているところから目先を変えようと、「分からなくなったすみれちゃんは何をしたの?」「ちょっと音読してみよう」と発問したのである。

S先生は、子どもの読みをもとに読んでいこうとしていたのだ。けれども、このままでは混乱し始めた子どもの状況に流される、そう思ったとき、ここは発問するしかないということになったのだらう。

「じっと、ノートを見ていました」というところに着目させる。そして、「すみれちゃんが見ているの、もう1か所あらへん?」と問い、2ページ先に書かれている「すみれちゃんは、もういちど、ノートを見ました。」という部分に着目させる。こうして、授業前に、ここに焦点化できればと考えていた「2回の『ノートを見ていました』のときのすみれちゃんの気持ちはどう違う?」という課題を子どもたちに示したのだ。

このことについて、私は事後研で次のように話している。

「子どもたちが『なきたいのか、おこりたいのか分かりませんでしたという気持ちが分からない』と言ったことを曖昧にしたまま、先生が課題を出してしまいました。その課題は決して悪い課題ではありませんでした。妹がかいた「ぐちゃぐちゃ」を、もう一度見つめるまでの間で、すみれちゃんの心に変化が生まれているからです。その変化を感じ取るのに、S先生が準備していた課題は的を射ています。けれども、この出し方は、子どもの読み在即していませんでした。では、どうすればよかったのか……。このようにすればどうだったでしょうか。

それには、子どもたちがこだわった「なきたいのか、おこりたいのか分かりませんでした」という気持ちを納得させなければなりません。まず、『すみれちゃんがおこりたいと思うのはどんなことをおこりたいの?』と考えさせます。そうすれば、自分のノートにそんなにかかれたら怒りたくなるというのではないのでしょうか。そこで次に、『じゃあ、なきたくなるという気持ちは?』と問いましょう。そうしたら、自分の大事なノートにぐちゃぐちゃにかかれたら泣きたくなるということも言うてくるでしょう。つまり、その二つの気持ち、両方ともよく分かるねということになるのです。そうしたら、『二つとも思ったからどっちか分からなかったんだね』というようなことを言う子どもも出てくるのではないのでしょうか。

つまり、『おこりたい気持ち』と『泣きたい気持ち』をすみれちゃんのそのときの状況を思い浮かべながら別々に考えさせればよかったのだと思うのです。そうしておいて、『そんなすみれちゃんのことを考えながら、そこのところ、だれかに音読してもらおうね。みんなは、そんな気持ちになっているすみれちゃんはどうしたか、また聞かせてね』としてはどうだったでしょうか。子どもたちから、そんな気持ちになって『じっとノートを見ている』すみれちゃんのことが出てくるのではないのでしょうか。それを待って、あの課題を出せばよかったのだと思います」

もちろん、この対応を瞬間的な判断で実行することは容易なことではない。しかし、子どもが取り組む学びにおける焦点化は、子どもの気づきや考えから離れては出すことはできないのだ。離れて出せば、子どもにとって唐突なものとなり、そこから読まされる読み方へと転落する。どんなよい課題でも、その課題を全身で受け止めて考えようとするには、子どもにとっての「旬」がある。それを嗅ぎ取る嗅覚が教師に必要なのだと思う。

これは、ある意味、究極の授業力と言える。簡単なことではない。しかし、子どもの読みでつくる授業において、こういう対応ができると、そこから子どもの感動的な読みが生まれることになる。十分な経験を積んでこられたベテランのS先生には、簡単なことではないけれど、ぜひ目指してってもらいたいと思う。それには、子どもの読みに心を砕き、子どもの読みとテキストの文章とのつながりに心を砕く、そういう実践を、ゆっくりと、丁寧にやってもらえればと思う。私も、そうしてきたし、今もそうしていることである。

それにしても、ベテランの先生が、新たな気持ちで取り組むと、これほど質の高い事実が生まれ出るのである。一斉授業の手法しか知らないなどと思ってはならない。一斉授業だったとしても、そこで培われたものに大切なものがたくさん含まれている。その蓄積されたものが、新たに芽を吹く、それがベテラン教師の授業改善なのだ。

それにしても、ベテラン教師の授業改善の道筋が、S先生の授業によって、開かれたことの意味は大きい。若い人だけでなく、ベテラン教師にも「学び合う学び」の授業づくりに取り組んでもらいたいと思っている私には、本当にありがたいS先生の授業だった。

2 探究的学びに変える

学習指導要領で示された「主体的・対話的で深い学び」は、教師によって教えられる学習ではなく、子どもが自分たちで取り組む探究的学びである。コロナ禍の影響により、こうした学びへの取組は大幅に遅れたのだが、本年度なって各地において積極的な取組が始まっている。私のかかわる学校もその例外ではない。

取組が軌道に乗ったことにより明らかになったことがある。それは、子どもたちで取り組む学びにするために、探究に値する「課題」がなければならないということである。このことはコロナ以前においても言われていたことなのだが、それまで取り組んでいた人だけでなく、多くの教師によってそのように考えられるようになってきたのだ。

これからご覧いただくのは、本年9月から11月の間に、私のかかわる学校で行われた授業で提示された「課題」である。

(1) 中学校2年技術「エネルギー変換に関する技術」の授業より

授業をしたO先生は、学習指導案に次のように記している。

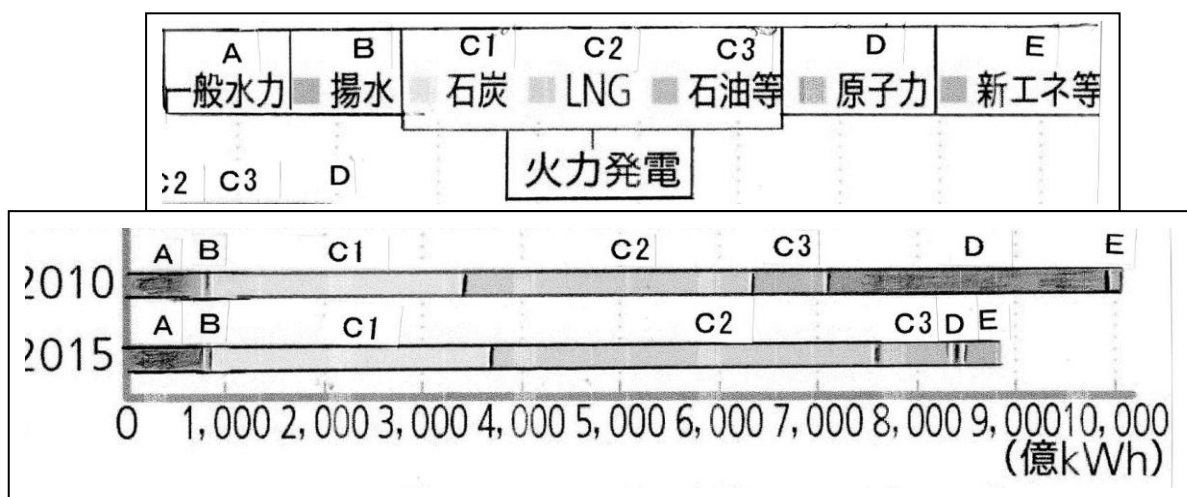
—— 戦後続いた電力会社による電力の供給体制は、海外の自由化や規制緩和などの流れと福島第一原子力発電所の事故による電力システムの改革推進により、その第一段階として電力広域的運営推進機関の設立（2015年4月）が行われ、消費者が電力会社や電源を主体的に選択できる

時代になった。これは、私たち消費者が、電力インフラを作る過程に参画できるようになったことを意味する。したがって、この学習は、日本の社会・経済に大きくかかわっているとと言える。そのため、生徒には、日本のエネルギー問題を正しく理解し、現象の課題認識をするとともに、将来的に逃れられないグローバル化や人口・環境問題なども見据えて（SDGsの視点に立って）、技術的な視点から課題解決を図る創造型の学びが求められる。――

○先生は、このような題材観に基づいて、子どもたちに、各発電方法のプラス面・マイナス面を踏まえて8年後の日本があるべき姿を考えさせようとした。示した学習課題は以下のようなものだった。

今後の日本のあるべき姿として、どのような電源構成であるべきか、2030年、日本のエネルギーミックス(組み合わせ)を考えよう。

探究的学びは適切な資料が必要だ。○先生はいくつかの資料を準備していた。その一つが下のような「エネルギーミックスの変遷」(資源エネルギー庁『エネルギー白書2017)である。ご覧いただいたものは、○先生が示したものの一部分であり、授業においては、2010年までについても1960年から10年ごとのミックスも示されていた。



授業を参観した私は、これは壮大な課題だと思った。たった1時間や2時間で考えをつくりだすことは難しいと思った。それぞれの発電方法が抱える課題、その課題が社会に与えている影響を勘案しなければならないし、そのためには様々な未来予測が必要になる。けれども、こうしたことを課題として考え、議論することは大切なことなのだ。これからの時代を生きるには避けて通れない問題だからだ。子どもたちにも関心を抱いて考え続けていてもらいたい、そのきっかけとして、出発点として、子どもたちなりに考えさせる、それが○先生のねらいだったのだ。

ここではこの課題に対して子どもたちがどのようなエネルギーミックスを作成したかは略すが、30分近い時間、すべてのグループが考え合い続けたことを知ってもらいたい。教師が明確な認識を持ち、子どもの関心を引き付ける課題提示をすれば、子どもたちはこんなにも深く考えるのだということが強く感じられた授業だった。

(2) 中学校2年社会科「日本の諸地域〈北海道地方〉」の授業より

探究の学びの実現には、上記の技術の授業からも分かるように、どういう資料を準備するかが

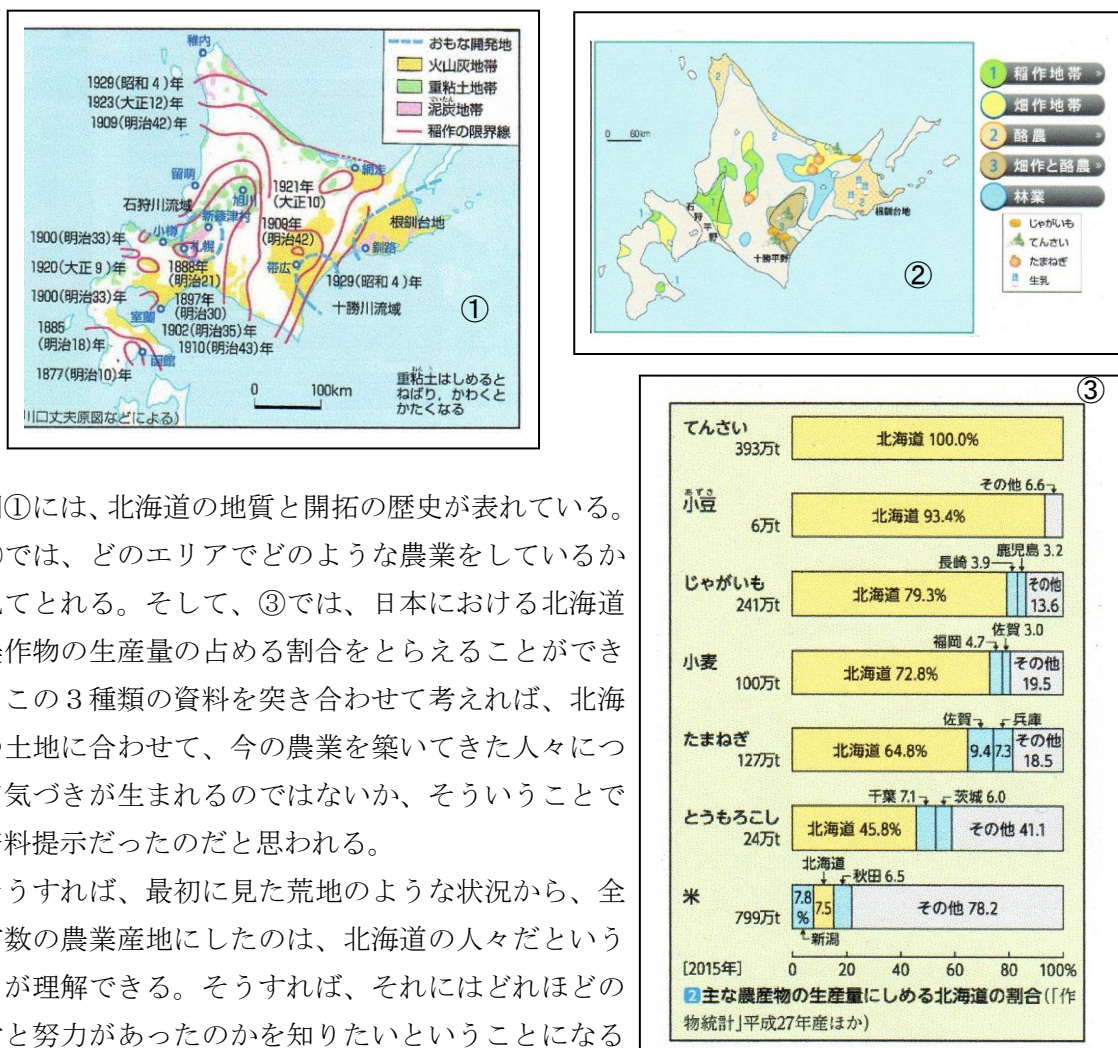
決定的に大切になる。S中学校で参観した社会科の授業でそのことが話題になった。

私が驚いたのは、授業をしたY先生が、考えられないほどの量の資料を準備されていたことだった。Y先生は、そのたくさんの資料をコンピュータ端末に収納して授業に臨んでおられ、子どもの探究の状況に応じて提示されたのだった。

Y先生が提示した課題は、下のように極めてシンプルなものだった。

北海道の人々の努力は？

授業の始め、Y先生が子どもたちに見せたのは、開拓される前の北海道と、現在の農業地帯の写真だった。そして、上記の課題を提示する。そのうえで、子どもたちのタブレットにいくつかの資料を送り込んだ。そのうちの3つが下のようなものである。



図①には、北海道の地質と開拓の歴史が表れている。図②では、どのエリアでどのような農業をしているかが見てとれる。そして、③では、日本における北海道の農作物の生産量の占める割合をとらえることができる。この3種類の資料を突き合わせて考えれば、北海道の土地に合わせて、今の農業を築いてきた人々について気づきが生まれるのではないかと、そういうことでの資料提示だったのだと思われる。

そうすれば、最初に見た荒地のような状況から、全国有数の農業産地にしたのは、北海道の人々だということが理解できる。そうすれば、それにはどれほどの苦勞と努力があったのかを知りたいということになるのではないかと、そういうことだったのだろう。

探究の学習で大切なのは、「よい課題」と、「適切な資料」なのだ。

(3) 小学校4年算数科「図を使って考えよう」の授業より

4月は、コロナ禍は依然として続いていだけれど、新年度開始とともに、それまで行われていた制限がかなり解除になり、世の中全体に少しずつ平常の生活に近づけていこうという雰囲気

生まれた、そんな頃だった。そこへ、G小学校から、4月に来校してほしいという要請があった。本年度、子どもが探究する学びに取り組みたいので、それはどういう学びなのか一緒に考えてほしいという考えによるものだった。

こうして始まった取組は、少しずつ先生方の授業に変化をもたらした。それを顕著に感じたのは、11月の訪問で見せてもらった算数の授業においてであった。

授業をしたK先生が、子どもたちに提示した課題は、次のようなものだった。

H先生は、K先生から、おつりが出るように10,000円もらって、運動会で4年生が使うものを買いに行きました。

はじめに、布を売っているお店に行って、同じねだんの布を36まい買い、そのあと、CDショップに行って、1,210円のCDを1まい買う計画で、学校を出発しました。

しかし、実際には、布は計画よりも4まい多く買い、CDは値上がりしていて計画よりも120円高いのを買うことになり、H先生のおさいふから530円かしてもらったのを加えてしまいました。

もし計画通り買い物ができていたら、そのときの合計の代金は何円になっていたでしょう。

読んでいただいて気づかれたと思うが、これは授業をしたK先生の手づくりである。教科書に出ている問題ではなく、それまでの学びを勘案しながら、自分たちの学校の状況で本当に起こりそうな場面を想定した課題にしたのである。何よりも、その教師としての心構えを称賛しなければならない。

教科書は全国どの地域でも使えるように編集されたものである。だから、それをそのまま使えば、場合によってはその地方にマッチしなかったり、学びの意欲が生まれなかったりする可能性がある。大切なのは、教科書は標準的、平均的なものとして、それぞれの学校・教師が、その学校の子どもたちに合うように変更したり組み直したり、学びを深める内容を加えたりすることである。そのように手づくりすることで、子どもに合致するだけでなく、教師の教材研究も深まる。そのことを実感させられた授業であった。

(4) 小学校4年体育「体づくり運動」の授業より

ずいぶん前のことになるが、私の若かった頃の体育の時間は、サッカーなどのボール運動、跳び箱などの器械運動、走る、跳ぶといった陸上競技などを、力いっぱい行うこと、そこでは技を高めることに主眼を置いていたように思う。そして、ときには遊び感覚の楽しみの時間にもしていた。しかし、今、その様相はかなり異なっている。

A小学校のN先生が、その学校の中心授業において体育の授業をしてくれた。その授業を見た先生方は、夢中になって取り組む子どもの姿に感心し、その取組によってプレーが上達していくことを実感したのではないだろうか。授業がそうなったのは、N先生によって準備された課題があったからである。

N先生は、当日の授業デザインに次のように記している。

—— 体づくり運動は、体を動かす楽しさや心地よさを味わうことにより、自分や仲間の体の状態に気づき、体の調子を整えたり、仲間と交流したりする「体ほぐしの運動」と、体の基本的

な動きを総合的に身につけるための「多様な動きをつくる運動（遊び）」から構成されている。一

課題が設定されたのは、二つ目にあげられている「多様な動きをつくる運動」においてである。

写真①を見ていただきたい。3人の子どもが1チームになり、そのうちの1人がフープを持ち、後の2人がフープの左右に分かれ、ボールがフープの中を通るようにパスするという運動である。



写真①

そうしておいて、次に取り組むことになったのは、フープを手に持つのではなく転がし、転がっているフープの間でのボールパスをするという課題だった。それが写真②である。

この課題で、ボールパスが一気に難しいものになった。何回もパスを続けることができない。そこで、チームで集まって考え合う。その気づきを全員で紹介し合う。フープの回し方、パスをするときの姿勢、フープの動きとパスの動きの連動性、それらが子どもの気づきとして出される。そして、もう一度挑戦する。子どもたちの引き締まった表情。3人の息が合っている。



写真②

「ハイっ」、フープを転がすときの掛け声が響く。フープがまっすぐ転がる。パス……できる！ 2回、3回、わあーっ、何回もパスできた！ いいぞ、いいぞ！ と先生の声。

課題があるとこんなにも子どもは夢中になる。こんなにも体を動かすことができる、こんなにもうまくできるようになる、こんなにも子どもの息が合ってくる、それは、ただ運動しているだけとは全く異なる子どもの姿だった。

本号は、「広がってきた授業を変える取組」と題して、「ベテラン教師の授業が変わるとき」と「探究的学びに変える」という二つの取組を見ていただいた。

どちらも、「主体的・対話的で深い学び」の具現化に向けた事例である。「子どもが取り組む学び」にするための先生方の実践である。これは、単なる授業の方法ではない。子どもたちの未来に向けた必然なのだ。子どもたちになんとしても必要な学び方なのだ。

OECD（経済協力開発機構）から「ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）」が示され、その中で「生徒エージェンシー」という概念が出された。それは、「生徒が自分の受ける教育において能動的な役割を果たす」という考え方に基づくもので、「働きかけられるというよりも自らが働きかけること」と述べられている。これは、まさしく「子どもが取り組む学び」であり、私たちがいま取り組んでいることは、まだまだ成長過程ではあるけれど「生徒エージェンシー」に合っているとってよいのではないだろうか。

では、そのために、私たち教師は、何をどうすればよいのだろうか。

そう考えたとき、その第一は、いま行っている自らの授業を見直すことだと言える。そして、そこから新たな出発を切ることである。それは、困難を伴うことかもしれない。それでも、私たちはその方向に歩みを進めなければならない。

そのとき、本号で紹介した事例を参考にしていただけたらと思う。

子どもたちの未来のために。そして、教師である自分自身のために。